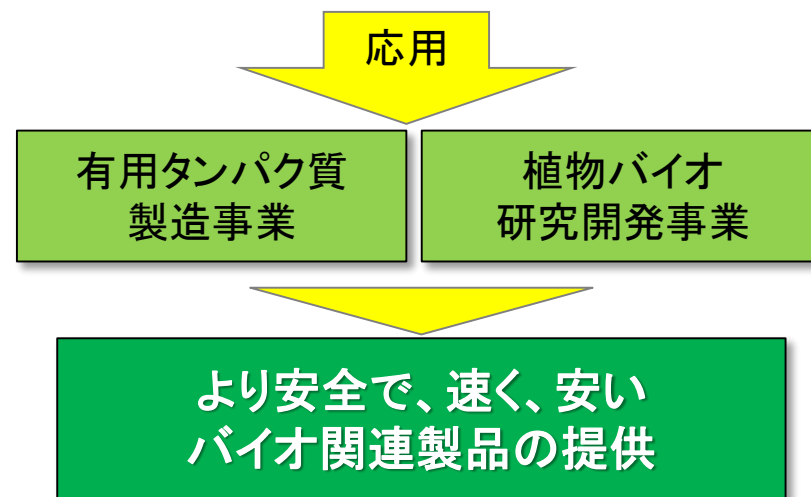


会社概要

称号 株式会社UniBio
設立 2011年3月11日
所在地 新潟市西蒲区新飯田潟88
資本金 6,000万円
代表取締役 結城洋司
従業員数 7名(パート含む)

事業コンセプト

一過性遺伝子発現法による
植物利用型タンパク質生産技術



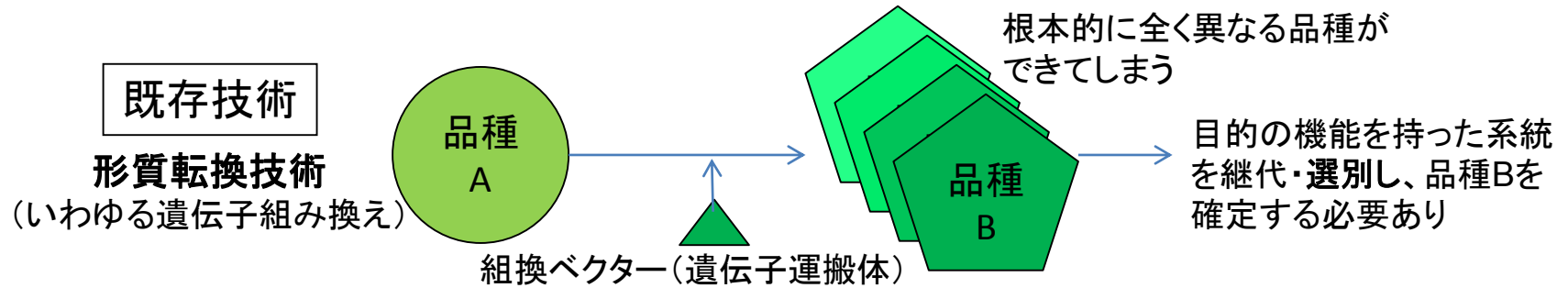
植物利用型技術を使って...

- ヒトと植物では共通して感染する病気は存在しない ⇒安心安全な製品の生産
- 一過性発現技術により、新規遺伝子組み換え作物の育種などの時間のかかる工程なしに、迅速に有用タンパク質の生産が行える ⇒需要に対し敏感に対応できる

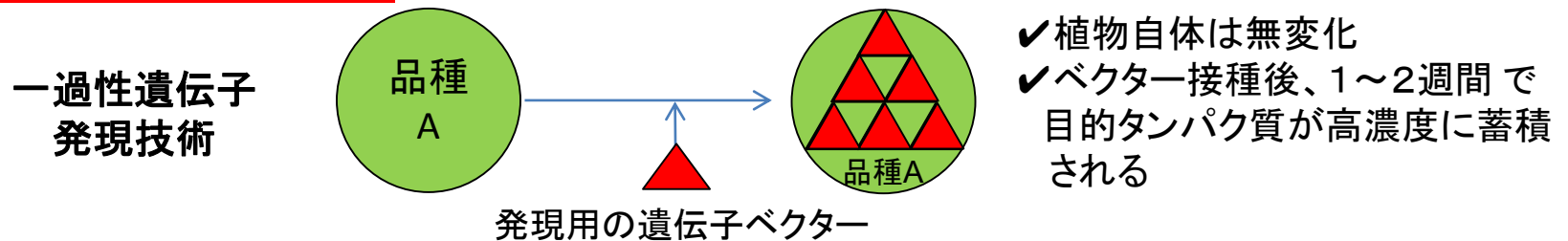
Green is clean !

使用する技術(一過性遺伝子発現)の概要

UniBioが使用・応用する技術は、植物の遺伝子を組み替えず、必要なタンパク質のみを合成する画期的な技術です。



UniBioが使用する技術





この20年間は、形質転換技術によって除草剤耐性などの性質を獲得した作物(大豆、綿花、トウモロコシ等)が開発され、生産向上をもたらしました。しかし、これらの成果を出すにはいずれも約10年という長い年月を要していました。

一方、新しく登場したバイオ技術一過性遺伝子発現技術は、より簡便に、より短期間に、より多く、より安価に高付加価値製品をつくりだせる技術です。

植物以外の生産技術との比較①

UniBioが使用しているタンパク質合成技術は、競合生産技術(植物以外を使用)と比較しても、コスト、安全性及び品質において優位性や特色をもっております。

	UniBioの技術 (植物を用いた生産技術)	競合技術 (微生物や動物培養細胞を用いた生産技術)
宿主	植物  グリーンハウスの植物で生産	大腸菌等  大がかりな装置必要
コスト面	植物の栽培コストは非常に低いため、生産コストも非常に低く抑えられることから製品価格も安価にすることができる。	組換え微生物及び動物培養細胞による生産の場合、培養に高価な製造設備や人工培地が必要となり、生産コストが高くなる。
安全性	自然界の植物より産生するために安全性をアピールできる。	培養する際に動物由来物質を使用するので、外来性微生物や不要なタンパク質の混入が危惧されるため、安全性に不安が残る。
品質面	増殖用培地は不要、ヒトに対する病原微生物のコンタミはないといった特徴がある。	増殖用培地が必要且つその成分を取り除く工程が複雑であり、品質の確保が難しい。